

真剣で私に恋しなさい！～暦の五月～ 改

ナマクラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてその存在を知らぬ者はおらず、今では忘れ去られてしまった一族がいた。異能を操り、最強の戦闘一族という称号を与えられながらも、いつの間にか歴史の波に飲み込まれ消え去ってしまった一族の名は『暦』。

これはその血脈を受け継ぐ者たちが、『暦』の名を再び世界に知らしめる物語である。

※この物語は以前にジファン様にて投稿して諸事情により削除された作品のリメイクになります。ただし、設定・話の流れ・登場キャラクターなどが、一部を除いて大き

く変わっていますので、ご了承ください。

目次

第零話	狂信者は成し遂げる	—	1
第一話	皐月薫は日常を過ごす	—	8
第二話	皐月奏は誑かす	—	25
第三話	完璧者は動き出す	—	44
第四話	黛由紀恵は困惑する	—	69

第零話 狂信者は成し遂げる



——昔の話をしよう かつてその名を知らぬ者はおらず、そして今では忘れ去られてしまった、とある一族の話を——

——その一族は、日ノ本において最強の戦闘一族と称され、『味方にすれば負けなし、目を付けられれば滅亡あるのみ』とまで言われた——

——あらゆる歴史の転換点に裏で関わってきたときえ言われているこの一族は、しかしある時を境にしてその舞台から姿を消した——

——最強の戦闘一族の突然の失踪に当時の有力者たちは不気味に感じ慄いたが、しかし時が経つにつれて彼らへの畏怖の念は薄れ、ついには彼らの存在自体記憶から消えていった——

——その一族が消えた理由は今では誰も知る由もないが、しかし彼らの血脈は今の時代も紡がれていた——

——その一族の名は、 “曆一族” と言った——



閉め切られた薄暗い空間。何かの計器や機械が発する光だけが部屋を照らし出している中に白衣の男がいた。

「ふ、ふひっ！ ひひひ！ 成功だ！ 九鬼に潜り込んだのは正解だった！ ヒトクローン技術の確立・運用をこும்早く可能にするとは……！そこに潜り込めた私の運も捨てたものではないな！」

男は九鬼財閥が秘密裏に行っている計画、『武士道プラン』の関係者であった。しかし今いるこの施設は九鬼とは全く関係のない場所である。

彼は九鬼財閥の技術を盗用して、己が願望を叶えようとし、そしてそれを成し遂げたのだ。

「——武士道プランの関係者がこんなところで何をしている？」

その背後に、突如として金髪の鋭い眼光をした執事が現れた。彼の名はヒューム・ヘルシング。九鬼財閥に所属する従者の一人であり、かの武神・川神院総代である川神鉄心の好敵手となるほどの武力を持つ最高戦力である。

「……ヒューム・ヘルシングか。思ったよりも遅かったね。まあ九鬼の地盤を盤石にすべくその能力を振るっていたからなのだろうが……故に私の願いは成就した！」

九鬼の所有する最強の戦力と言ってもいいヒュームを前にしても、彼の態度は変わらない。どうあがいても逃げる事が出来ないこの状況にあっても笑みを浮かべ、己が心中を嬉々として吐露する。まるで、この状況が危機ではないとも言えるように。

……否。正確に言えば、彼にとって危機というものが既に存在しなくなっているのだ。願いが成就した時点で彼は己が身に何が起こったとしても構わなくなった。たと

え九鬼に捕まり、その結果死に至ったとしても構わないと心の底から思ってしまった。

彼を一言で表すのならば『狂人』という言葉こそがふさわしい。

「私が、あの御方の敬虔なる僕であるこの私が！ 教主より授かったあの御方の一部にて！ この手であの御方を蘇らせたのだ！ ああ、それは何と素晴らしい事か！ あの御方がついに復活されたのだ！」

「貴様、何を言っている……？」

「貴様らにはわからんよ！ あの御方の素晴らしさが！ 全てを超越したあの力を！」

ああ、その御力で世界の全てを——」

「——もういい。黙れ」

その言葉と共に放たれたヒュームの一撃は狂ったように己が思想を垂れ流す研究者の意識を刈り取った。その研究者に戦闘力があつたわけではないのだからこの顛末は当然の帰結である。

「……………気に入らん」

「——どうやら終わったようだね」

「マーブルにクラウディオか」

ヒュームが気絶した男を確保すると、この部屋につながっていた通路から、魔女のよ
うな装いをした女性——マーブルと眼鏡をした執事——クラウディオが現れた。

「制圧自体は容易いものだ。コイツ自身は脅威になどならん」

「彼の周辺には人が雇われた形跡もありませんでしたし、抜け道もありませんでしたか
らね」

「——ま、とにかく一段落はついたって事だろ？」

そしてその後から着崩したスーツに額の十字傷が特徴的な男が部屋に入ってきた。

彼の名は九鬼帝。九鬼財閥のトップに立つ男である。

「一段落とは言っても、この男の背後関係を探る必要はありますがね」

九鬼財閥による秘密プロジェクトに参加できるほどの能力を持つとはいえ、一介の研

研究者が個人でここまでの研究施設を持てるとは思えない。その辺りも詳しく調べていく必要があるだろう。」

「コイツの処分は後ほど決めるとして、こちらの方はどうする?」

「武士道プランのヒトクローン技術を流用して生み出された命……一体どのような人物を蘇らせようとしたのでしょうか?」

クラウディオの疑問に答えたのは、既に部屋にある研究資料を調べ始めていたマープルであった。

「なるほどねえ……確かにヤツは所謂邪教の狂信者とやらだったみたいだ。こんなヤツを蘇らせてどうしようってんだい」

「なんだ? 何か有名な悪人でも蘇らせようとしてたのか?」

「いや、頭にドをつけてもお釣りがくるくらいにはマイナーな悪鬼・都市伝説の類です。知っている奴も本当に数えるぐらいしかいないんじゃないですかねえ」

「そんなマイナーなヤツまで知ってるとはさすがはマープル、星の図書館と謳われるだけの事はあるわな」

「というよりも実在するかも怪しいものではないですか？」

「だが危険性は凄まじいものさ。もしアタシの知ってる伝承通りに成長したら厄介な事になるね。そういう意味じゃここで始末しちまうのも一つの手だね。だけど……」

「クローンといつても、そのまま同じ人間になるとは限らないわけですから、疑わしきは罰するといったように処理してしまつても良い物か……悩みどころですね」

「……で、どうされます、帝様？」

「そうだな……ならよ——」

——そして、物語は始まる

第一話 皐月薫は日常を過ぐす



——男の話をしよう 見目麗しいと称するに相応しい一人の少年の話を——

——男は幼少期、ある事情から今の養父母の元へ引き取られ、そしてある事情から預けられたその地で運命の出会いをする——

——風間ファミリーと呼ばれる彼らとの出会いは、当時の少年にとって大きな変化を齎した——

——そして少年は成長し、現在では容姿端麗、文武両道、さらに家事万能と、文句の付けようのない程になった——

——もちろん欠点がないというわけではないが、それを差し引いたとしても高スペック

クである事には変わりないのも事実である――

――しかしそんな彼も、誰にも知られたくない秘密を抱えて日々過ごしている――

――これは、そんな一人の少年の物語である――



――川神院――

太陽が地平の彼方より姿を見せ始めた早朝、開いた襖から一つの人影が現れた。

長襦袢を身に纏ったその人物は、その腰まである紺の長髪を柵引かせて廊下を歩いていく。顔の造形は整っており、中性的とも言えるその容姿は、肌の白さも相まって穢れないものでありながら、どこか色気を感じさせるものであった。

この人物の名は皐月薫。一時期川神院に預けられ、風間ファミリーの一員となり、現在は川神学園に通う学生である。

一時期故郷に戻っていたが、進学先として川神学園に通うようになった今では、昔からの縁で川神院に下宿している。

その薫が洗面所に向かうため廊下を歩いていると、玄関にて一人のポニーテールの少女、川神一子が薫に気付いて元気よく声をかけてきた。

「あ、おはよー薫！」

「おはようワン子。今日もこれから新聞配達か？」

「うん！ ついでにそのまま修行がてら走り込みに行つてくるわ！ ……とここで薫はどうしてここに？」

「顔を洗うために洗面所に行こうと思ったのだが……」

「……薫の部屋からだ、洗面所ってこと逆方向じゃない？」

「……そうだな。どうやらいつも以上に寝ぼけていたようだ」

「あ、あはは……それじゃアタシはそろそろ行くわね！ 後でまた修行見てよね！」
「わかったよ。気を付けていつてらっしゃい」

一子を見送った後、無事洗面所に辿り付いて顔を洗つて意識を覚醒させた薫は、ジャージに着替えて布で髪を背中中の辺りで括つてから、まだ誰もいない鍛錬場にて一人で一時間程自己鍛錬を行う。

本人曰く、『健康の為にしている鍛錬』との事だが、常人からすれば十二分にハードな

内容である。それを毎日熟している薫も必然的にそれ相応の実力を持つてしていると推測されるが、その性格からか、薫の実力を実際に目にした者は数少ない。

鍛錬場にも人が増えてきた頃、自己鍛錬を終えた薫は風呂場にて軽く汗を流し、制服に着替えた後、その上から割烹着を纏い、髪を後頭部辺りで纏め直してから厨房へと足を踏み入れる。

「おはようございます」

「おはようございます薫殿。いつも助かります」

「これくらいならなんてことはないですよ。それで、何からしていきましょう?」

「ではまず——」

そのまま薫は川神院の修行僧に振舞われる朝食の準備を手伝い始める。

大人数の修行僧を抱える川神院の食事は凄まじいものである。手伝いとはいえずそれは決して片手間で出来るような事ではないが、これもまた日課として熟してきたためか、薫にとっては既に慣れた作業であった。そのついでに弁当を二つ拵えるのも習慣になつていた。

「お腹空いたー。何か摘ませろー」

そこへ朝の鍛錬終わりで腹を空かせた黒髪紅眼の美少女、川神百代が現れた。

「あともう少しで出来るから少し我慢をしてくれないかな、モモちゃん」

「えー、我慢できないから来たんだろー。何かくーれーよー」

「我慢しなさい」

「ちえー……隙あり——！」

その瞬間、まさに神速と呼ぶに相応しい速さで既に出来上がった玉子焼きに百代の手が伸びた。

「——駄目と言っているだろう」

が、誰も認識できないと思われたその百代の動きを、薫は的確に見切つて玉子焼きに手が届く前に百代の手をパシンとはたき落とした。

「薫のケチー！ ちょっとくらいいいじゃないかー！」

「……はあ、少し今日の弁当、おかずを増やしてあげるからそう拗ねない」

「本当か！ さっすが薫！」

「危ないっ!? 今は包丁持っているから抱き付かないでくれ！」

薫の気遣いに百代は後ろから抱き付いて喜びを表現する。本来は嬉しい行動だが、手に包丁を持つている薫としては堪ったものではない。

「うーん、それにしてもだ。何て言うか……エロいな」

「……いきなり何を言い出すんだ？」

「似合っている割烹着に普段は髪で見えない色気あるうなじ……女の私でも後ろからガバっとしたくなるエロさだ」

「それ今実際にしている……というかそれは褒めているのか？」

「褒めてる褒めてる。惜しいのはお前が男だっという事だなー」

「……そこは惜しいのか？」

……今まで紹介してきた皐月薫だが、その顔立ちや体の線からよく女性に間違われる

が、歴とした男である。



—— 廃ビル・秘密基地 ——

風間ファミリーというものがある。

キャップと呼ばれる風間翔一を中心に集まった幼馴染の集まりである。

始まりは幼少期の風間翔一と直江大和、そして岡本一子——のちの川神一子の三人だったが、そこに島津岳人、師岡卓也が加わり五人に、さらに川神百代、皐月薫が加わり七人、最後に椎名京が加入して八人となった。

中学の時、京が両親の離婚により川神を離れて静岡の学校に行く事になった。

彼女は誰よりも風間ファミリーというグループを愛していた。それこそ、ファミリー以外には興味がないと言ってもいい程に。

だからこそ、彼女は時間を作って金曜から週末にかけて川神に戻ってきていた。もちろん風間ファミリーの面々も京のために予定を空けて金曜日には秘密基地である廃ビルに集まった。

そしてその習慣は、川神学園に入つて京が川神の島津寮で暮らすようになった今でも続いている。

誰もやめようとは言わない。何故なら秘密基地で仲間が全員集まる時間は、その心地よい物であるからだ。

これが今も続く『金曜集会』である。

そして三月の第二金曜日であるその日も、風間ファミリーの面々は秘密基地に集つていた。

「ぐまぐま……」

「いやーうめえな薫の作ったクッキー！」

袋に入ったクッキーを貪り食う一子の横でリーダー・風間翔一はそのクッキーを作ってきた薫に感想を伝える。

「そこまで大したものではないよ。時間があれば作れるようなものでしかないし」

「はい、みんな。飲み物の準備ができたよ。というか僕は薫に作られたわけじゃないよ
マイスター」

「いやどう考えてもそういう事じゃないだろ」

薫とともに飲み物を入れてきた球体型のお世話ロボット、クッキーの反応に軍師役の
直江大和がツツコミを入れる。

「というかバレンタインのお返しで作ってきた薫の菓子を男共も食うってどういう事
だ。それはチョココをやった私に献上すべきだろ。特にガクト」

「何でだよモモ先輩、俺様だってちゃんと貰った分は返しただろ?」

「いやいやホワイトデーにプロテインを渡すとか前代未聞でしょ!」

百代の発言に対して筋肉を強調しながら反論する島津岳人に、少し線の細い少年、師
岡卓也は思わずキレのあるツツコミを入れる。

「あ、大和、私へのお返しは自前のホワイトチョコレートでいいよ。既成事実、既成事実」
「少し自重しようか京」

そしてどきくきに紛れて大和へ愛の告白を超えた事を口にする椎名京。

この八人と一体が風間ファミリーであり、このやりとりこそ彼らにとってのいつもの通りの日常であつた。

「じゃあそろそろ明日何するか決めようぜ！」

「あ、その前に少しいいか？」

リーダーである翔一が今日の議題を上げようとした時、薫が挙手してそれを止めた。

「お、何だ薫？ 何か提案でもあるのか？」

「いや、そうではなく、伝えたい事があつてだな」

「伝えたい事？ ……彼女ができたとか？」

「そしたらクロス。盛大にクロス」

「ははは、男の嫉妬は見苦しいぞガクトー……………で、相手は誰だ？」

「姉さんも落ち着きなよ」

京の発言によつて敵意を滲ます岳人と百代を大和が諫めるが、しかし二人の態度が変化する様子はない。

「彼女はまだいないが………というか何故それで殺されなければならないんだ……」

その様子を見て呆れて溜息を吐きながらも、気にしてもしょうがないと割り切つた薫は本題に入る事にした。

「実は妹が今度川神に来ることになつたんだ」

「妹？」

「こつちに来るつて観光か何かで？」

「いや、進学先に川神学園を選んだらしい」

「おお真剣か」

「てつきり地元の進学校に行くのかと思つていたのだが、入試に合格したから3月中には川神に来ると連絡があつたんだ」

「なら妹ちゃんも川神院で預かるのか？ ジジイから何も聞いてないが」

「いや、川神院とは別に下宿先はもう見つけてあるらしい。それで何だが……」

そこで言いにくそうに口を閉じて、一区切りを付けてから再び口を開いた。

「私もそちらに移ろうかと思っている」

「……………へ？」

「何、だと……………!？」

薫の発言にまず驚きの声を上げたのは、意外にも同じく川神院の住人である百代と一子であった。

「下宿先の部屋なのだが、妹一人で暮らすには広いらしく、両親としても妹一人だと心配だという事もあって打診されたんだ。私としてもいつまでも川神院で世話になり続けるのもどうかと思っていたのでいい機会だと思い、少し考えてみる事にした」

「学長とかには言ってるの？」

「鉄心さんには既に了承を得ている。今度下見に行く予定だが、まああの妹が選んだ場所だから問題はないだろう」

「でもそれだけで川神院から出ていくってよく踏ん切れたなあ」

「やっぱり妹さんが心配だからかしら？」

「それもあるが、それ以上に妹も私を心配していて……」

「何でさ!？」

「何やら、川神院で迷惑をかけてないかとか一人で学校に行けているのかとか……」

「前者はともかく後者は否定できねーわな」

「こつち戻ってきてもう一年になるのに未だに川神院から学校まで迷わずに行けねーもんな」

「そんな事はない！ 半年前くらいにはもう迷わずに登校可能だった！」

「迷わなくなるのに半年かかった時点で問題あるからね！」

卓也のツツコミに、渋い顔をしながら薫は手にした湯呑を口にして一息吐く。

「……………ま、まあそんなわけだから——」

否定できない所を突っ込まれて何も言えなくなってしまうた薫は話の矛先を戻そうと改めて口を開いた。

「異議ありッ!!」

が、それは百代の力ある一声によって遮られた。

「モモちゃん、異議ありって……?」

「決まってるだろ! お前が川神院から出ていくって事は、誰が私の弁当を作るっていうんだ!」

「……いや、モモちゃんの弁当は川神院の調理担当の人も作っているだろう」

「それは早弁用だ! 昼休みに私がユミとかに見せびらかしながら食べる弁当がなくなるじゃないか!」

「姉さん、そんな事してたの?」

「弁当くらいならこれからも作ってくるが……」

「どうかどういいう経緯で薫がモモ先輩に弁当作るようになったんだ？」

「元々はモモちゃんが借金をする機会を減らすためだったんだが……」

「ちなみに借金の度合いは前に比べてどうなのモモ先輩」

「……そ、それは……うん、何て言うか……」

「むしろ昔より増えてない？　姉さんへの借金を俺に対して取り立てに来る人、数増えた気がするんだけど」

「……これからはモモちゃんの方は作らないでおこう」

「うわああああ!!」

「見事に墓穴掘ったね」

「……よくもばらしてくれたな、やゝまくと〜!」

「矛先がこつちに!!　薫、助けてくれ!!」

「そんなわけで下見に行くから明日は抜けさせてもらおうよ」

「しゃーねーなー」

「あれ、スルー!!」

「てか薫の妹ってどんな感じなんだ？」

百代に絡まれる大和を放置したまま、ちよつとした疑問が頭に浮かんだ翔一は薫に尋ねる。

「どんな感じと言われても……とりあえずガクトの好みからは外れているとは思うぞ」

「まあ薫の妹って事は当然俺様よりも年下なわけだしな」

「よし！ じゃあわかりやすく『何々系女子』で表してみろ！」

「そうだな、何というか……」

翔一の出したお題に、緑茶で喉を潤しながら少し考え、言葉に迷いながらも薫は口を開いた。

「……黒幕系女子？」

「それどういう子なのさ!？」

「とりあえず恐ろしく頭の回転がいい。そして人を使うのが恐ろしく巧い」

「つまり、大和みたいな感じ？」

「いや、大和とはまた違うタイプだな。大和はギブ&テイクで人を動かすタイプだが、奏は何と言うか……策謀と忠誠と虚言で動かすタイプと言えればいいのか」

「とりあえず腹黒そうな事はわかった」

「つまり詐欺師？」

「お前たち、人の妹を何だと思っっているんだ」

「黒幕系女子扱いしてたお前が言うな」

こうしていつものように金曜集会の夜は騒がしく流れていった。

……しかし、この決断が後に彼の人生を大きく変える事になるとは、この時誰も知らなかった

第二話 皐月奏は誑かす



—— 女の話をしよう 生まれながらの支配者たる少女の話を——

—— 少女の生まれは平凡だった 父は書道家、母は武道家と、支配階級とは縁遠い家柄だった——

—— しかし少女は生まれながらにして支配者としての才覚を持っていた——

—— 今まで少女が通った全ての教育機関は、全て少女の色に染まり、少女の手足となつた——

—— 少女と敵対した者はその悉く打ち破られ、解体され、殲滅され、少女の傘下に組み込まれた——

——一般階層に生まれ、後天的な教育もないままに、少女は支配する側の人間であつた——

——しかし少女の望みは叶わない　生まれながらの支配者であるが故に叶う事はない——

——一人の女として意中の男と結ばれたいという願いが叶わない——

——己が支配する側から降りなければ叶うわけもない願いだと、少女自身が一番知っていた——



私が彼に会つたのは小学生の頃だった。

父が友人の元へと訪ね、色々あつてその友人の子供であつた彼を養子として引き取る事になって、父が家に連れてきたのが最初の出会いだつた。

当時の彼は何を考えているのかわからず、特に主張もせず、要望もなく、感情も出さず事もなかった。『ただ生きていくだけの死体』などという表現があるが、そう言い表すのが適切であるように子供ながらに感じていた。

彼のそんな様子を感じ取った両親は、このままではまずいと母の伝手で川神院という武道寺に預ける事にした。

……今思えば、当時の彼に惹かれる要素などなかったのだが、しかし私はその当時からどこか彼に惹かれていた。おそらく一目惚れだったのだろう。

それからしばらくして、彼は我が家に戻ってきた。そこからは家族として私たちは絆を育んでいった。……長期休暇の間は川神院で過ごしていたのには少しばかり嫉妬していたが、その辺りは置いておくことにする。

そんなある日、彼に私の夢について話した。友達や先生、親にも話しても曖昧に笑われ、遠回しに現実を見ると窘められた私の将来の夢の話を。

出来れば彼にはこの夢を笑わないで欲しかった。しかし内心、きつとこの人も同じような反応をするのだろうか……そう思っていた。

「それは具体的にはどういう形でしたいんだ？」

「……………え？」

だからこそ彼に真顔でそう返された時には思わず呆けてしまった。

その後、私は語った。それは無我夢中に語った。夢を叶えるための具体的な方策、過程、問題点、解決策。頭の中で思い描いていた夢の設計図、そして語っていく中で新たに湧き出てくるアイデア。その全てを飽きもせず語り続けていた。

その私の語った夢の方策に対して、彼は静かに聞き、時に疑問を呈し、時に改善案を出した。もちろん私の案を否定する事はあったが、しかしそれでも私の夢自体を否定する事はなかった。

「……………どうして笑わないの?」

「……………笑う所があったのか?」

つい私が零したその疑問に対しても、彼は本気で疑問で返してきたのを見て、彼は本心から私の夢を応援してくれているのだと信じる事ができた。

「お前の夢に協力できるとは言わないが、応援する。簡単に成就するとも言わないが、きつとお前なら出来るはずだ」

「どうしてそこまで言えるの？」

「何かに挑む事はとても素晴らしい事だ。人はきつと、試練に挑む事で更なる高みへと昇れるのだと私は信じている。諦めなければ夢は叶うと信じているんだ」

笑みを浮かべながらそのように語る彼の顔から私は目が離せなかった。



「……で、お前は一体何を企んでいるんだ、奏……？」

「企んでいるとは失礼ですね。何を根拠に言っているのですか？」

皐月薫は頭を抱えながら、隣に立つ一人の少女に問い掛ける。

純白のブラウスに朱い紐タイを巻き、黒のロングスカートを優雅に着こなした黒の長髪の少女——皐月奏は、自信に満ち満ちた表情を浮かべながら兄の言葉に対してさらに質問で返した。

ここまでで薫が感じたおかしな所を的確に指摘するべく、今日の行動を振り返る事にする。

まずは川神駅にて今日引越してくる妹の皐月奏と待ち合わせをして合流。ここまでは問題ない。

奏の先導の下辿り着いた下宿先は、二階建て庭付きの一軒家。ここまでも、まあ問題はない。

特にインターホンなどを鳴らすなどもせずに何故か持っている鍵を使って勝手に入っていく。中には誰もいなく、家具はあるものの生活臭は感じられない。どう考えても明らかにおかしいが、一度置いておく。今一番指摘しなければいけないのはそこではないのだ。

今何よりも指摘しなければならない点、それは……

「普通の家にこんな地下室なんてない！……地下室はあつたとしてもこの規模は異常だ！」

今いる場所は、その下宿先である一軒家にあつた地下室。だが地下室などという括り

で済ませていいものでは決してなかった。

地下へ降りるための隠し階段。階段を下りた先にある指紋認証システム付の重厚な扉。扉の先に延びる長い通路。その通路に沿ってある無数の扉と終点に存在する扉。扉の先には、様々な情報を出力している巨大モニターや複数のコンソールが設置されており、どこかの指令室のようにも思えた。

例えるならばアニメや漫画で出てくるような秘密組織が使っているような秘密基地と表現してもおかしくない規模にまで広がった地下空間がそこにあったのだ。

「流石は兄さん、こんなに早く気付くとは……」

「いや誰だつてすぐに気付くだろう」

むしろツツコミを入れるのを我慢した方である。普通の家にこんな地下空間は存在しない。子供だつてわかる事である。

「それで、結局ここは何のための空間なんだ？」

「それはですね……」

奏は胸を張って嬉しそうに宣言した。

「ここは秘密結社『暦』の川神における拠点の一つなのです！」

「……………」

自信満々に、顔を輝かせてそう言い切った奏に対して、薫は一瞬思考が止まった。

「……………」ちよつとお前が何を言っているのか、わからないよ」

「あ、結社名の『暦』は前例に倣いましてご先祖の一族名からいただいたんですよ」

「違う、そこじゃない」

よくわからないことがさらに増えた事で薫は考えるのをやめた。無駄に考えて袋小路に迷い込むよりも奏の解答を聞いた方が確実かつ早いと判断したからである。

「では順番に説明しましょうか。まずこの家ですが、元々あった建物を私が別名義で買い取って改造……もとい改装しました」

「買い取った……？ お前、その金は一体どこから出したんだ？」

「私が趣味で転がしている企業とか株とか人とかのその他色々からです」

「何故その齢で企業や株を動かしている……!?!? とうか人を転がすって……!?!?」

一体法律をどう掻い潜っているのか疑問である。というよりも転がすという表現自体が恐ろしい。

「ちなみに他の住人は……」

「いませんよ。ただ所有者が未成年の私では面倒な事になり兼ねませんので名義上は私の下ぼ……『暦』の構成員の名前で埋めています」

「今、下僕って言い掛けたよな？」

一体どこで妹は歪んでしまったのだろうか。そう思ってしまった薫は決しておかしくはないだろう。

「……それで、その『暦』とやらは一体何をする組織なんだ？」

「『暦』は将来的に私の夢を叶えるために作った組織です。まあ今の時点で出来る事とい

えば、その前段階、下準備とかですね。活動内容は中学時代にしてきた事の延長ですし」「お前の夢……という……」

「はっ」

一度言葉を区切ってから、はつきりと薫の目を見て宣言した。

「——『世界征服』です！」

——幼少の頃より語っていた彼女の夢。それは『世界をこの手で操りたい』という、所謂『世界征服』と呼ばれるものであった。

「この一年程の活動で地元において出来る事は粗方済ませてしまったので、範囲を広げるためにこちらに来ました」

この一年で『暦』という組織はその勢力を広げ、その上で資金や人脈、その他諸々準備を整えてきたのだろう。

上流階級の出でもないただの中学生でありながらたった一年でそれほどの成果をあげたこの少女の才覚に薫は改めて驚嘆するとともに嬉しく思う。

荒唐無稽とも言える『世界征服』という夢に対し、奏は己の持つ全てを以って成し遂げようと活動をしている。その姿は輝きに満ちて好ましいモノに思えた。

「しかし力を蓄える段階でよく川神を拠点にしようと思ったものだな」

この川神には元より悪の秘密結社やそれを相手取るヒーローがいる上、さらに国に匹

敵する程の力を持つ九鬼財閥のお膝元でもある。そこに拠点を置けば当然それらの勢力とぶつかり合う可能性も十分出てくる。

「その程度、乗り越えられなければ世界を手中に収めるなんて出来ないでしょう？ それに九鬼がどの程度の物なのか、実際に調べるのにもちようどいいですし」

確かに世界を手中に収めようとすれば、いずれは必ず九鬼財閥と対立する事になるだろう。ならばまだ目を付けられていない段階で将来立ちはだからであろう相手を視察しておくのも悪くない選択である。

「そうか。お前も色々と考えて邁進しているのだな。私は嬉しい——」

「あ、あと『暦』の活動の一環として、兄さんには『完璧者』として力を揮ってもらおうつもりです」

「……………え？」

奏が『完璧者』という言葉を口にしたその瞬間、薫の思考は凍り付いた。

喉は一瞬で乾いて漏れる声は掠れ、しかし身体からは冷や汗が滝のように流れる。

「……………あの、奏？ あの、どういう……………」

「ただ見守っていた中学時代での反省を生かしてこの川神で『完璧者』がより動きやすくなるよう全力でバックアップします。以前よりも充実したサポートができるようになりましたので、装備の向上も現場でのサポートも万全です。以前のようにただ記録するだけではないと断言します」

「い、いやそうではなく……………」

——薫がここまで動揺している理由、『完璧者』とは何か……………それを説明するには皐月薫が中学二年辺りの事を振り返る必要がある。

当時の皐月薫は優等生という言葉がとても似合う中学生であった。学年を問わず多くの学生に慕われ、教師陣からも深く信頼されており、まさしく品性方正な学生であつ

た。

しかしそれでも年頃の男子中学生である事には間違ひなかつた。男ならば程度の差はあれ必ずかかると言われている病気に罹つてしまったのだ。

そう、中二病の発症である。

その症状は軽症とは決して言えないものだつた。とはいへそれは普段から所謂イタ言動をするようなものではなく、あまり人目に付くようなものではない。

その症状とは、『ぼくのかんがえたかつこいいせつてい』を考え、『ぼくのかんがえたかつこいいコスチューム』を自作で作り、『ぼくのかんがえたかつこいいキャラクター』になりきる。言つてしまえばそういうものだ。その所謂『ぼくのかんがえたかつこいいしゅじんこう』こそが『完璧者』と呼ばれるモノである。

薫も最初は自室の中だけに留めていたが、徐々に他人に見せたいという顕示欲は高まつていき、夜の街に繰り出して不良などを相手に所謂『正義の味方ゴツコ』をするようになった。……ただまあ、世間体を気にするくらいには客観視は出来ていたため、当然ながら自分の正体を隠しての行動である。……正体隠してこういう事する自分ってカッターという思いが無きにしても非ずであつたのだが。

しかし幸いと言うべきか、薫の中二病は早い段階で鳴りを潜め始めた。当然その行動は盛大な黒歴史となったが、しかし誰にも知られる事無く自分の中だけのもので抑えられたので何の問題もなく薫の中二病は終わった………かのように思われた。

中二病の時の薫、『完璧者』の活動をまるでストーリーカーのように追いかけてその活躍を余すことなく記録した猛者がいたのだ。

その猛者はあろうことか、その記録から薫の正体がわかる要素をなくすように編集した映像を動画投稿サイトにて全世界に発信したのだ。

そして編集技術がよかったのか、あるいは『完璧者』という存在が視聴者の琴線に触れたのか、その動画は100万再生を優に超え、今もなおその再生数を伸ばし続けている。

正体自体はばれていないものの、まさか自身の黒歴史を世界に公開されることになるとは思っても居なかった薫本人はその事実を知った際に意識が遠のいてしまった。もしもこの動画に気付いたのが自室でなければ大惨事になっていただろう。

「私も元の記録やディレクターズカット版を今でも時々見直しますが、完璧者としての兄さんは活き活きしてますよね」

「やめろ、思い出したくない……思い出したくない……!!」

……なおこの動画を投稿したのは彼の妹である皐月奏その人であるのだが、今は置いておこう。

「……というか私にとって『完璧者』が中二病で生まれた黒歴史なのを奏は知っているだろう?」

「中二病が黒歴史になるのは、ありもしない妄想を現実映して奇行に走るからです。ですが、兄さんの場合は別に妄想ではなかったじゃないですか。例え中二病でも結果を出せば、それは黒歴史ではないんです」

「いやそれは何か違うだろう」

例え正しくても恥ずかしいものが黒歴史であり、というよりアレは完全に自身の妄想であり……と頭の中で考えがこんがらがって薫が言葉を出せずにいるのを知ってか知らずか、奏はさらに踏み込んでいく。

「第一、兄さんは今のままで満足なんですか? というよりもこの一年、空いた時間は何に使っていたんです?」

「え、そうだな……炊事洗濯の手伝いに、仲間が集まって話をして、後は健康の為に鍛錬を……」

「家事に井戸端会議にフィットネスってどこの主婦ですかっ！」

「あれ、そういう取られ方をするのか？」

川神での日常を主婦扱いされて驚く薫。しかし奏の表現を聞いていると違和感がないのもまた不思議である。

「昔はもつと精力的に行動を起こしていたじゃないですか。それが今は何ですか？まさに主婦の如き生活。それが悪い事だとは言いませんが、それは本当に兄さんのしたい事ですか？」

「それは………」

中二病時代が恋しいわけではないが、しかし今の生活が心から望んでいるものかとか、かれれば素直に領く事はできなかつた。

風間ファミリーと過ごす日常は掛け替えのないものであるし、川神学園での生活も楽しくやっている。文句があるわけではない。

あるわけではないのだが……しかし何か満ち足りない。そんな感覚を抱いていたのも確かである。

「兄さんは、今のままで本当に輝けると言えますか？」

「」

その奏の言葉に、薫は何も言い返せなかった。

「……少しだけ、考えさせてくれ」

本来であればきっぱり拒否してもおかしくないにも関わらず、薫は答えを濁す事しかできなかった

——この時奏は思った。「落ちたな……」と

第三話 完璧者は動き出す



——そこは、不思議な場所だった。

暗闇に包まれたように周囲一面黒に染まっているにも関わらず、地平の先まで見通せるほど視界は澄み渡っていて、しかし何も無いが故に何か見える事はない。そんな、常識で考えればうまく説明できないよくわからない場所。

そこに一人、私は立っていた。

またか……そう思いながらその場にとどまっただけでも仕方ないと一歩、二歩と慣れたように足を進めると、下が水面という訳ではないにもかかわらず、歩みに合わせて水滴を落としたように波紋が広がっていく。

その事をいつもの事だと気にすることなく進んでいけば、やがて広がる波紋の先にこ

の空間に唯一存在しているであろう見覚えのある建物へと辿り付いた。

四方を鳥居に囲まれ、神事などに使われそうな神楽殿のような舞台に、何が祀られているのかわからない祭壇。

その中心には、いつものように黒い影で覆われた一つの存在が座していた。

『久しぶり……という程でもないか。よく来たな』

その声はどこかで聞いた事があるような声だった。

その姿はどこかで見た事があるような姿だった。

そのように感じながらも、しかしはつきりと認識する事の出来ない朧気な存在である彼は、今日も私に語りかけてくる。

『どうだった？ 久しぶりに暴れまわった感想は？』

「未だに厨二病から抜け出せていない事にシヨックを隠し切れない」

彼の言葉にそう返しながら、私も舞台の上に腰を下ろす。

『そんなくだらない観念など捨て置いて好きに生きればいいものを……』

「くだらなくはないと思うが……お前が消えてくれれば問題なくなると思うのだが」

『おいおい、酷い事を言う。私とお前は一心同体、なくてはならない存在だぞ』

「誰が一心同体だ」

『それに妹も言っていただろう？ 恥と思わなければ黒歴史ではないと。だからこそ開き直ればいいものを』

「それはそれでどうかと思うが……」

『昔はもっと無知で従順だったのにこうも否定してくるとは……嬉しいような寂しいような複雑な気持ちだな』

「お前は私の親か」

『似たような物だろうよ』

私に対して馴れ馴れしく雑談を交わしてくるこの臆気な存在を説明するには、少し私の記憶に付いて語る必要がある。

幼い頃の記憶、それを克明に憶えているという人は少ない事だろう。

それは私としても同じではあるのだが、昔の記憶……具体的に言えば今の父母に引き取られる以前、どのような家庭で育つてどのような環境が取り巻いていたのか、殆ど憶えていない。ただ、厳しい父と微笑む母と、期待を寄せる大人たちに囲まれていた……ような気がするが、憶えているのはそれだけである。

医者や両親に聞いた所、私と本当の両親は事故に巻き込まれたらしく、その際に私を残して両親は亡くなり、生き残った私としては精神的なショックにより記憶を失ってしまったのだらうとの事だ。

要は、世間一般に記憶喪失と呼ばれる症状らしい。

それが影響してなのか、小さい子供などに時々見られるらしい自分の頭の中に実在しない友達を作り出して会話をするという行動……所謂『見えないお友達』と小学校高学年になっても私は会話をしていた。

とはいえ、今でも会話を続けているというわけではなく、歳を重ね、人と触れ合う毎にその存在は己の生み出した妄想であると自覚した事で、いつしか現実で『見えないお友達』と会話する事はなくなった。

しかしその『見えないお友達』は完全に消えたわけではなく、今でもたまにこうして夢の中で私に語りかけてくる。

そう、この影こそが私の妄想が生み出したであろう産物。『完璧者』と呼ばれる姿の元となった『見えないお友達』であった。



朝日が昇る頃に起床し、洗面所に向かう。以前いた川神院と比べれば洗面所の場所は目と鼻の先程度しか距離がないので万が一にも迷う訳もなく辿り付き顔を洗う。

その後、動きやすい服装に着替えてランニングに出かける。近所を30分程走って戻る予定が、道に迷いさらに30分延長となる。

身体に纏わりつく汗を流すためにシャワーを浴びようと浴室へ向かい、扉に手をかけ、そこで中から人の気配を感じ取り、先客がいる事に気付く。

「……後にするか」

いくら兄妹とはいえ、裸で一緒になるのはまずいとタオルを手に脱衣所から出ていく。

濡らしたタオルで体の汗を拭った後、台所に立ち朝食の準備に取り掛かる。川神院にいた頃、基本的に朝は和食だったが、奏の嗜好が洋食寄りであるためか最近では洋食が

多くなっている。

メニユーはそこまで凝った物ではなく、こんがり焼き色の付いたトーストにカリッと焼き上げたベーコンを添えたスクランブルエッグ、後は適当に盛り付けたサラダにインスタントのコーンスープと簡単に出来る物ばかりなのでそこまで手間はかからない。BGM代わりにテレビを付けると、株が暴落した、為替市場が荒れたなどニュースを流れていた。

用意した朝食をテーブルに並べて、流れてくるキャスターの声を聞きながら紅茶とコーヒーを淹れていると、少し髪を湿らせている奏が姿を現した。

「おはよう奏」

「おはよう兄さん、コーヒーか紅茶を頂戴」

「ほら、どっちがいい？」

「あら、もう用意してくれていたんですね」

薫は既に用意していたコーヒーと紅茶の両方を差し出す。その内、奏は紅茶を選んで受け取り口を付けた。

「……うん、おいしい」

「市販の安物の紅茶なのだが」

「市販の安物でも入れ方一つで味が大きく変わりますよ」

そう語りながら紅茶を口にする奏の姿は優雅でとても絵になる光景であった。それを見ながら薫は残ったコーヒーに口を付ける。口の中に独特の香りと苦味が広がり、頭の中がスツキリしていくようにも感じた。

「まあ今はそんな事よりも九鬼財閥です」

「いきなりだな。九鬼がどうかしたのか？」

「川神に来てから、九鬼財閥を観察してみても改めて理解しました。あれは並大抵の組織ではどうにもならない相手です」

「……まあそうだろうな」

「経済力だけでなく人望や権力が凄まじく、半ば治外法権のような扱いを黙認されている節があります。政府にとって都合がいい味方であり、そして敵に回したくない……いえ、敵に回すことが出来ない存在にまでなっています。もはや一つの国家と言っても差し違えないでしょう。……もし仮に彼らが国家転覆を企てていたとしてもこの国はどうする事もできないでしょうね」

もし実行する段階となれば政府に手出しをさせないための準備はするだろうし、例え失敗してもそれを有耶無耶にしてしまえるのだろう。国家転覆という世界規模の事件を引き起こしたとしてもそれを表沙汰にさせないだけの力を九鬼は確かに持っている。

また、九鬼の思惑から外れた組織がいた場合、買取や裏取引、あるいはその武力を以つて相手を潰し、その力を取り込む事も躊躇せず、そしてそれを『人々の為の行い』として正当化し、事実それを体現できてしまっている。

だからこそ大衆は九鬼に賛同し、世界は九鬼の様子を伺い、故に政府は九鬼に手を出せない。

「……ある意味、私の理想に近いですね」

世界を自身の手の内で転がしたいがために世界征服しようとしている奏にとつて、それは一つの手本であり、見本であり、理想形であり、そして何よりも遥か高く立ちはだかる壁でもあった。

「それで、その九鬼に対してお前はどうか対抗するんだ？」

「そうですね……九鬼は裏の組織に対する備えを十全にしています。その上で可能であれば取り込もうとしてくる。ならば表に後ろ盾があれば九鬼とはいえ手を出しにくくなるでしょう。とは言え生半可な後ろ盾であれば意味がない」

裏から九鬼を操れるのならそれが一番手っ取り早いのですが完全には無理ですし……と、トーストを齧りながら何でもないように付け加える奏に、完全でなければできないのかと薫は苦笑する。

「裏から崩せず、ただ正面切って戦おうとしても力を付ける時間がない。なら、一気に九鬼に対抗できる力を築き上げるしかないです」

「……それは矛盾していないか？」

「完璧とは言い難いのも事実ですが、タイミングを見極めれば不可能ではないですよ」

真つ当とは言えないでしょうけど、と付け加える奏の言葉に虚飾や焦りといったものを見受ける事はできなかった。本当にタイミングさえ見極める事ができれば可能であると確信しているだろう。

「そしてその切っ掛けを作るためにも、今は秘密結社として地下活動に資金集めに人材集めと、裏で色々としないと」

「地下活動……それは私にやらせている不良狩りも含まれているのか？」

「もちろん。『完璧者』も大変役に立っていますよ」

「それにしても最近、不良狩りしかしてない気がするのだが……」

積み重なる黒歴史や羞恥心と戦いながらも完璧者として妹の夢に貢献していると言え、聞こえはいいが、結局やっている事は単なる不良狩りである。相手が不良とはいえ、別に胸を張れるような事ではないのは確かである。

「街の浄化と更生という意味では効果は出ていますよ」

「というと？」

「完璧者に遭遇してフラフラと街で屯するのをやめた人も少なからずいます。完璧者の言葉を聞いて心が揺さぶられた不良もいます。完璧者の噂を聞いて行動を抑えた人もいますし、逆に完璧者に反抗する者も纏まってきてあの場所の全容も把握できてきました。なにより完璧者の動画は信者・アンチ問わずに色んな影響を与えています」

「そうか………うん？」

——
今彼女は何と言った？



——
親不孝通り・路地裏
——

政令指定都市である川神の汚れ・穢れを集めたかのような治安の悪さを誇る親不孝通り。事実、川神で最も治安が悪い地域の一つであり、その入り口とも言えるその通りは、夜から一日の本番が始まるとでもいうように、日が落ちた今も人が増えていつていた。

そう言った性質からか、夜の仕事をを行う人だけでなく、所謂不良と呼ばれるような人種も多く集まっていく事になる。彼もその一人であった。

彼は親不孝通りで最近流行の合法ドラック『ユートピア』を売りさばく売人であった。とは言っても、彼がつるんでいる不良グループのトップの下働きのような物であり、彼自身どこからユートピアを仕入れているのか、またユートピアを売った相手がどうなる

うと知った事ではなかった。ただ今いる場所に居たいという意識外の感情と売り捌いた利益の一部を駄賃としてもらえるという事から彼はクスリを騙され易そうな人間に売り付けていた。

「——ハア、ハア、ハア！」

そんな彼は今、暗い夜道を走っていた。

片手に売り捌いていたユートピアの粉末の入った袋を握りしめいたが、それは今抱いている感情に耐えるためにしていた行為であり、彼としてはクスリユートピアなど最早どうでもよかった。

普段は軽薄な笑みを浮かべていそうなその顔に今見られるのは、何かへの恐怖であり、その走り方はまさしく何かから逃げているように見えた。

事実、彼は入り組んだ路地裏を全力で逃げていた。

特別目立つような事をしていただけでもない。いつものように親不孝通りの路地裏

で、他の仲間とグループの纏め役から販売用のクスリを受け取っていただけだった。

その時その場に現れたおかしな格好をした人物によって襲撃を受け、人数差で返り討ちにしようとして失敗し、そして今に至る。

「ハ、ハ、ハまで来れば……………」

背後を伺って追ってくる人影がない事を確認した所で男は足を止める。普段ここまでする事がないため、盛大に息切れを起こした彼は座り込まないようにビルの壁にもたれかかる。

喉を潤すために何か飲み物が欲しいところではあるが、周りを見渡しても自販機の一つも見当たらない。人気がない路地裏を逃げてきたのだから当然といえば当然であるのだが、しかし彼は苛立ちを抑えずに、その手にしていた袋をを地面に投げつける。

「クソ……………！ 何で……………俺が、こんな目に……………!!」

背中に触れているコンクリートが熱くなった身体を冷やしていくのを感じながら、荒い息を整えて悪態を吐く。酸素不足のせいか上手く働かない頭を無理やり稼働させて

これからどう動くかを男は考えようとしたが、それを妨げる音が男の耳に入ってきた。

かつん……かつん……と、暗闇より鳴り響くその甲高い音は、靴底がアスファルトを叩くそれであつた。

「――」

その足音は一定のリズムで、とても走っていた彼に追いつけるような物とは思えない。しかし、その音は確かに彼が先程まで逃げていた物と同質のものであると不思議と理解できてしまった。

そんなバカな……そう思いながらも視線は靴音が響いてくる方向に固定されている。そして灯りが少なく先の見ええない暗がりから、その存在は現れた。

腰に軍刀を帯び、黒を基調とした軍服を思わせる恰好

性別を感じ取れない中性的な身体の線

夜に溶け込むような宵闇色に柵引く長髪

軍帽が落とす影によって全貌が把握できない顔

その影ですら隠せずこちらを覗く金色に輝く眼光

その存在は、紛れもなく先程から己を追い続けている襲撃者であった。

「ひっ……!?!」

その姿を認識した瞬間、男は反射的に逃げようとしたが、しかし疲れ切った身体は言う事を聞かずに足がもつれ、その場で尻餅をついてしまった。

それでも逃げようと立ち上がろうとするが、いつの間にか近づいてきていたその金色の瞳と視線が交わり、男は起き上がる気力を奪われたかのようにへたり込んでしまった。

その様子を見ていた軍服姿の彼の者はもう一步近づいて、自らを見上げる男を見据えて、その口を開いた。

「——貴様は何がしたいのだ？」

「……………へ？」

その問い掛けに、男の口から出てきたのは間の抜けた疑問符であった。その男の返答とも言えないものを気にするわけでもなく、彼の者は言葉を続けていく。

「目的もなくただ夜の街に出て、このような下らないクスリを売って小金を得て、その果てに無様に逃走して追い詰められる。これが貴様のしたかったことなのか？」

彼の者は、先程彼が苛立ち混じりに叩き付けたクスリを拾い上げ、純白の手袋に包まれた掌に握り込んだ。すると何かが焼けるような音と焦げるような臭いが周囲に零れる。

そして彼の者が手を開いた時、そこに白い粉は存在せず、代わりにそこにあつた黒く焼け焦げた塵が焦げた臭いと共に空に消えていった

「無為無駄無益。貴様のしている事は何の価値もない。今散つていった塵と同等。そう断じられた所で何の否定も出来ない。それでいいのか？」

このような事を言われたなら、普段の彼であればただ侮辱された事に反応して怒りに任せ、相手に罵声を浴びせた事だろう。

しかしその人物が放つ言葉は不思議と心の奥底にまで響き、怒りではない感情を引き出していく。

憤怒？ それは先程違うと否定したばかりだ。

恐怖？ 当然それもあるが、それだけではここまで目を引かれる理由がわからない。

歓喜？ この状況で感じるわけのない物だが、しかし何故か否定しきれない。

これは、畏怖だ。

大きすぎる存在に恐怖し、あまりの理不尽に行き場のない怒りを抱き、しかしその存在に心惹かれ、この出会いにどこか歓喜し、いつの間にか敬意すらも抱き、そして心の底から魅了されて始めていたのだ。

「もう一度問おう——」

その魔性とも言える金色の魔眼に射抜かれて、目が離せなくなる。彼の人が行う挙動全てが五感全てを用いて己に刻み付けようと、自然と意識が吸い付けられる。

「——貴様がしたかった事は、何だ？」

「お、俺は——」

その言葉に、彼が口にした答えは——



「——つていう動画が最近また流行つてね」

そうやって今宵も秘密基地に集まった面々に卓也は自身が持ち込んだノートパソコンに映し出した動画を紹介していた。

「何だこの動画？」

「それって確か『完璧者』だっけ。懐かしいな」

「完璧者……何それ？」

「何年か前にネットで流行ってた動画だよ。昔一部の熱狂的な信者とアンチでよく炎上したりしてたんだけど、その最新動画が久しぶりに出てきてまた再燃してるんだ」

「あー、そういえば知り合いが最近騒いでたけど、その事か」

「しかもこれ、特定班によれば川神で撮られてるみたいなんだよね」

「特定班なんてモンも湧いてんのか」

「暇な人もいるんだね……大和好き」

「お友達で」

「でもこの……えと、かんぺきしゃ？ この人は不良を倒して何がしたかったのかしら？」

「おいおいワン子、これどう考えてもそういう筋書きなだけだろ」

「もしこれがリアルなら、相手が不良だとしても警察沙汰だもんね」

「いや、そうとも言い切れないんだよ。知り合いから聞いた話だから信憑性は薄いんだけど、不良になった友達がある日を境に真面目になったらしくて、どうしたのか訊いたら、ちよつと親不孝通りで何か変な恰好をした奴に諭されたとかで改心したらしい」

「おい何だその大雑把な説明は？ 納得できる要素が全くないぞ」

「俺もそう思ったけど、今の話聞いたらその変な恰好の奴つてのがこの完璧者じゃないかって思つてさ。これ親不孝通りらしいし」

「そうは言つてもカメラワークとか明らかにドラマとかつて言われても違和感ないし……どうやって撮つてるんだこれ？」

「無駄に技術使つて動画撮つてネットに上げるとかどれだけ自意識過剰なんだよ」

「でも面白れー事するよなー。会つて見たくねーか？」

「別に……」

「京はブレないなー。私はソイツが強い奴なら会つてみたいけどなー」

「モモ先輩もブレないね」

「てかどうやって会う気だよ」

「これつて川神なんだろ？ だつたら会えるんじゃないか？」

「川神つていつても広いだろ。特に親不孝通りの裏とかできればあんまり関わりたくな

い」

「うーん、ぜってー面白くなると思うんだけどな……って、どうした薰？ 何か顔色が悪いけど」

「……いや、なんでもない。ちよつと眩暈がただけだから……」

『完璧者』の動画を話のタネに盛り上がるファミリィを前に、薰は遠くなる意識を必死に繋ぎ止めながらそう答えた。

事前に動画の事を知ってなければ即死だった……と内思いながらも薰はそれを顔に出さないようにする。もしも特定されたら死にたくなりそうなので、少しでも正体を怪しまれる言動は避けたいというのが心情であった。

実際、今朝奏にその問題の完璧者動画を見せられた時には、恥ずかしさのあまり机に額を何度もぶつけたり床を転げまわったりしてしまった。……なお、その転げまわる様子も奏に記録されているのは気付けなかったようだ。

「疲れてんのか？ って、そういえば薰は妹さんと一緒に暮らし始めたんだっけか」

そんな薰の様子を疲れと取った翔一の発言から、話題は動画から薰の生活事情へと移っていった。

「私は最初同じ下宿って聞いてたんだけどなー」

「元々一緒に住むと言っていたはずだが……しかし当の私もまさかシェアハウスだとは思わなかった」

実際には奏の所有物なのだが、そんなことを話しても信じてもらえないだろうし信じられても困るのでシェアハウスという事で通す事になった。

「それで新生活はどんな感じなんだ？ シェアハウスっていつでも今は二人で暮らしてるんだろ？」

「どう、と言われても……生活習慣自体は実家に帰った時とそう変わらないな。さすがにちゃんとした大人の管理人がいらないのは拙いからハウスキーパーを探しているとは聞いているが……」

「オーナーの人も大変だねえ」

そのオーナーも成人していない少女なのだが、話がややこしくなるだけなので言及はしない事にした。

「つてことは、今は飯とか洗濯とかは二人でやってるのか」

「妹さんと家事の分担とかしてるの？」

「いや、家事は全部私がしてるよ」

「まさかの干物妹!?!」

「まあ薫はお母さん気質だから予想はできた」

「え？ 私は別にそんな気質ではないのだが……」

京の言葉に否と答えようとしたが、それにファミリーの面々がしきりに頷いているのを見て、何を言っても無駄だと察して反論するのをやめた。

「ちなみに妹さんは何してるの？」

「さあ……？ とりあえず精力的に外に出ているな」

勢力としてこの地に根を張りつつ人材をスカウトしているらしいとは聞いているが、薫も奏がどこまで手を伸ばしているのかまでは把握していない。今日も朝食を食べた後出掛けて行ったが、どこに行ったのかは聞いていない。だがその根は確実に伸びては

いるのだろうか。

この前も何気なく地下空間に潜ってみれば、モニターに世界地図が写し出された部屋で見覚えのない複数人がコンソールの前で何やら作業をしていて驚いた事は記憶に新しい。……少なくとも家に誰か入ってきた形跡はなかったのです、この地下空間に入る入り口は一つではないのだと薫は察した。

「もうすぐ学園も始まるというのに大丈夫なのだろうか……」

「あつ、学校といえ、薫は今の家から学校にはちゃんと迷わず行けそうなの？」

「……………」

「おーい、目を逸らすんじゃない」

「大丈夫だ。きつと……大丈夫、大丈夫……」

「明らかにダメそうな雰囲気は漂ってるよね」

「何だったらアタシが毎朝迎えに行くわ！ タイヤ引きながら行けば修行にもなるし！」

「いや、そこまでしてもらわなくて大丈夫だよ。いざとなったら妹に案内してもらえら
だろ？」

「普通に考えればそれ立場逆だよ、それ」

……こうしていつものように夜は更けていき——

——そして、新学期がやってきた

第四話 黛由紀恵は困惑する



—— 女の話をしよう 剣の道を走り続けた孤独な少女の話を——

—— 女の生れは特別だった 父は剣聖として称えられ、故に一種の神聖とされていた

—— 女の家庭は普通であった 格式は高かったが、それを笠に驕り高ぶる事など
在りはしなかった——

—— 女の才能は特別だった その身に宿りし才能は、剣聖を超えると賞された——

—— 女の教育は普通であった 両親からの教えを学び、礼を尊ぶようであった——

——女の根気は特別だった 幼少の身でありながら、唯只管に剣の道を歩んでいった

——女の価値観は普通であつた 他人を嫌うことなどなく、むしろ孤独である事を嫌つていた——

——それでも女は孤独であつた 友がいない事を寂しく思つた——

——「どうして私には友達がいないの？」 女は問い掛ける 誰もいないはずなのに

——「それは剣聖の娘だからさ」 答えは返ってくる 誰もいないはずなのに——

——そうして女は会話を続ける 誰もいないはずの、友との会話を——



——川神学園——

人が新たな一步を踏み出すの季節である春、この川神学園でも多くの新入生が足を踏み入れた。

川神学園の入学式が執り行われている体育館にて、檀上に上がった学園長の言葉を聞きながら、新入生の内の一人である彼女は思う。

——ここから私の新たな生活が始まるんですね

彼女の名前は黛由紀恵。川神学園へ進学するために、わざわざ北陸地方から川神市へと単身引越してきた新入生である。

進学先に彼女が遠く離れた川神学園を選んだのには彼女なりに理由があった。

由紀恵の父親は『剣聖』の称号を与えられた人物で、地元住人からは神聖視とも言えるほどの畏敬の念を抱かれている。

そしてその娘である彼女もまた、同様に地元住人から畏敬を抱かれていた。

その事が彼女にとって苦痛へと繋がった。

もちろん父親の事は尊敬している。父から受け継いだ剣技を捨てようなどと思った事は一度たりとてない。周囲からの期待が辛かったわけでもない。

ただ、周囲からの畏敬は彼女から人を遠ざけてしまう——彼女はそう感じていた。

彼女が辛かったのは孤独である。

尊敬する父がいる。敬愛する母がいる。愛すべき妹がいる。家族に恵まれていないなどとは口が裂けても言えない境遇だったのは自負している。

それでも、家の外では彼女は独りだった。家族以外に対等な存在などいなかった。それどころか距離があり過ぎて上も下も計れなかった。

故に彼女は地元から離れる事にした。畏敬で距離を取られてしまう故郷では彼女の

求めるモノは手に入れる事が出来ないと思つたからだ。

故郷から遠い場所であれば自分の事や父の事を知る人も少ないだろう。いたとしても地元住人のように距離を開かれる事もないだろう。

誰も己を畏れない。誰も己を怖がらない。誰も己を敬わない。

そんな真つ新な新天地から黛由紀恵の目的は始まるのだ。

そう、全ては——友達を作るために

「まー、入学前からいきなり学校の先輩に警察に突き出されたけどねー」

「うう、それは言わないでください……」

しかし今日の登校時の出来事は幸先が悪かつたと一人思い返して、会話相手にそれを指摘されて思わず落ち込んでしまう。

しかし今は大事な入学式の途中であるので改めて壇上に集中する。

学園長からの式辞が終わり、着々とプログラムが進んでいく。

「——続いて、新入生からの宣誓。新入生代表、皐月奏」

「——はい」

新入生代表——つまりは入試における成績最優秀者である。

成績優秀者だからといって人格的に優れているとは限らないのだが、しかし名前を呼ばれたその少女——皐月奏からはそのような人格不適格者などではないと一目見て感じ取れてしまった。

その姿は堂々と自信に満ち溢れていて、不思議と人を惹き付けるような雰囲気醸し出しているように由紀恵は感じた。

実際に周りを軽く見渡すと、周囲の人たちの視線が先程よりも強く檀上にいる彼女へと向けられているように見られた。

それだけ彼女の一挙動一発言が人を惹き付けていたのだ。

その様子を見て由紀恵は手元に目をやりながら呟いた。

「私もあの方のようになりたいですね、松風」

「大丈夫だまゆっち。オラが付いている」

彼女の視線の先には、木彫りの黒馬のストラップが鎮座して由紀恵を励ましていた。

(何、隣の人……何かブツブツ言ってると思ったらストラップと話してるんだけど……!?)

(刀持ってない？ 刀持ってストラップと会話するとか危険者じゃないの……!?)
(処される？ 処されるの？ 無礼な事したら処されちゃうの?)

……ストラップから声が出ているわけではないので、由紀恵の近くにいた新入生は内心穏やかなものではなかった。が、それに気付く事もなく、彼女は目標とする少女の姿を目に焼けつけていた。



「初めまして、黛由紀恵さん。少しお話いいかしら？」

——そんな目標の存在がいきなり声をかけてきた。

入学式、そしてクラスでの自己紹介も含めたHRも終わり、放課後になって周囲の人たちがそそくさと席を離れていって、友達を作るためにはどう行動するべきかを一人考えていた時の事だった。

「し、新入学生代表を務めていた方が私に話しかけてきましたよ松風!」

「お、落ち着くんだまゆっち! まずは冷静になつて自己紹介から始めるんだ!!」

「は、はい! ……ですが相手は既に私の事を知っているようですが、その場合自己紹介はした方がいいのでしょうか?」

「で、でもいきなり知り合いつぼく話す始めるのも失礼じゃないかってオラ思うんだ」

「た、確かに……! でも私、そもそも家族以外の知り合いもあまりいませんので知り合いつぼい話し方がわかりません」

「そりゃ一本取られたぜ! H A H A H A !」

「……………はっ?! ……ちらっ」

話しかけられてかここまで一人(と一体)でマシンガントークを続けてしまった事に、由紀恵はやってしまったと思いつつながら、テンパリ始めて逃げ出そうという選択肢を打ち

出そうとする頭を何とか抑えて、このままではいけないと恐る恐る相手の顔を窺う。

肝心の相手はというと、由紀恵の反応に驚いたのか、きよとんとした表情を浮かべていたが、すぐさまその口から笑い声が漏れ出してきた。

「剣聖の娘だと聞いていたから、もつと固い人なのかと思っていたのだけれど、思っていたよりもずっとユニークなのね」

思った程悪印象を与えてはいないようでほつと一息吐いた。

「まずは自己紹介からかしらね。私はI—S所属の皐月奏よ」

「え、あ、はい！ わわ私は黛由紀恵と申します！そしてこちらは松風です」

「おつすオラ松風！ まゆっちのソウルフレンドやらせてもらってる九十九神な！」

由紀恵としては渾身の自己紹介に何か気になるところでもあったのか、視線を一点に定めたまま奏の動きが止まってしまった。二人——特に松風に対して物凄く怪訝な眼差しを向けているのだが、色々と舞い上がっている由紀恵はそれに気付かない。

「おいおい、そんなに見つめられるときさすがのオラも照れるぜ」
「……まあいいわ。そういう人もいるわよね」

自分の中で納得したのか、奏は松風に注いでいた視線を由紀恵へと移した。そこには一種の諦念が込められていたのだが、普段と比べて気分が浮ついている由紀恵はそれに気付けなかった。

「ところで今から体育館で興味深い催しがあるそうだけど、一緒にどう？ 私たちの交友を深めるためにもいいと思うけど」

「は、はい！ 是非！」

「やったねまゆっち！」

お誘いに乗った由紀恵は、まだ慣れない校内を奏の先導の下、体育館へと向かう。慣れていないのは奏も同じはずなのに何故こんなに勝手知ったる動きができるのだろうかなどと思いつつも、会話がなくなつて沈黙が支配するのを恐れて勇猛果敢に話しかける。

「と、ところでその体育館で行われている催しはどのような物なのですか？」

「部活の勧誘のためのステージよ。私として見たいのは一つなんだけどね」

「ああ、つまり臯月さんはその部活動に入ろうか悩んでいるんですね」

「いえ、入る気は全くないわ」

「ええー……」

「じゃあなんで見ようと思ったのさガール？」

「私の兄が助っ人で今回のステージに出ると聞いたから見ておこうかと」

「あ、お兄さんがおられるんですね」

「ええ、最愛の兄よ」

そう語る奏の表情はまさに恋する乙女のようにだったが、憧れだった友達（仮）との会話をテンションが上がりまくりだった由紀恵が気付く事はなかった。

「実はまゆつちにも妹がいてなー。これがまた出来た妹なんだぜー」

「友達も多いですしね、私と違って」

「……わざわざ自虐ネタをいれなくてもいいのよ」

「友達のまゆつちを気遣ってくれる……ええ子やで」

「あ、えっと、お兄さんが助っ人されるのは何部なんですか？」
「ああ、それはこの……」

ナチュラルに「友達」という単語を口に出して立場を確定させようとしながら、その事を誤魔化そうと奏の兄が参加する部活動がどれか尋ねたその時、その声その場に大きく響いた。

「——」プツレーミアムに見つけたわ！ 皐月奏！」

その声の発生源を見ると、そこにはブルマ姿の女子が仁王立ちしていた。

「あ、あの……お友達の方ですか？」

「彼女はクラスメイトね。確か武蔵さんだったかしら？」

「武蔵小杉よ！ 学年主席で入学したからっていい気にならない事ね！」

「別にいい気にはなっていないけれど……そんな事より兄さんが出る部活はね……」

「ちよっと!? プツレーミアムな私の話はまだ終わってないとか始まってすらないんだけど!」

「……それで、私を探していたみたいだけど何か用かしら?」

溜息を吐きながらも奏は憤慨している武蔵小杉に対して用件を促す。ただその様子はあまり興味を持っていないようにも見えるが、そんな事を気にすることなく武蔵小杉はようやく話を聞く体勢になったのを見て満足気にしながら、口を開いた。

「皐月さん、貴女に決闘を挑むわ!」

ドドンツ! という効果音が付きそうな程気持ちよく言い切った武蔵小杉に対し、奏は特に気にすることなくこう返した。

「断るわ」

「なぬ!？」

ノータイムでお断りされて出端を挫かれた小杉であったが、気を取り直して自身が優位の立場であると周りに見せつけるために口を開いた。

「ま、負けるのが怖いのか？ この、プツレーミアムな武蔵小杉に!」

「そういうわけじゃなくて、私これでも色々忙しくてあまり時間が割けないのよ。ちなみに何で勝負するつもりだったのかしら?」

「もちろん、素手での戦闘よ!」

「私、自分で戦うのって苦手なのよね……代理人立ててもいいかしら?」

「駄目に決まってるでしょ! それ私が貴女にプツレーミアムに勝った事にならないじゃない!」

「なら面倒だから入試の点数で決める? 先生に聞けばわかるでしょう」

「もう結果出てるじゃないの!」

「貴女、我儘ばかりね」

「別に我がままじゃないわよ!」

思う通りに話が進まず調子を崩されてばかりの小杉に対して、その振り回している張本人はというと、小杉の様子を気にする事もなく少し考える素振りをみせてから良い事を思い付いたとばかりに提案する。

「なら……そうね。少し規模は大きくなるけど、クラスの投票で決める？」

「く、クラスの投票……？ どういう事？」

「おそらく近い内にクラス委員を決める事になると思うけれど、うちのクラスは優秀な人間が集まっているが故に、生半可な人が自分の上に立つなんて認められないわよね。かといって入学したての現状だと、判断材料がないに等しいじゃない」

「まあ、確かにその通りね」

「だから事前に勝負の事をクラスで通知して、投票までの間、決闘なり普段の振舞いなりでよりクラス委員に相応しいと判断された人の勝ちというのはどうかしら？」

「なるほど……ならその一環として戦闘での勝負もプツレーミアムにするって事？」

「選択肢としては問題ないわね。とはいえ、私たち二人の勝負とは限らないわよ」

「へ？」

「言っただけでしょう？ 委員長を決める決闘だって。貴女以外にも我こそはという人もい

るでしょう？　そういう人にも遠慮なく参加してもらおうわ」

「ぬ？」

「これは私たちだけの決闘じゃない。Sクラスを巻き込んだ決闘という事よ。そちらの方が貴女にとっても好都合でしょう？」

その奏の言葉に小杉は考える。本来であれば有力な生徒一人一人に決闘を挑み徐々に自分の地位を確立していく予定だったが、このクラスぐるみの決闘を受けて勝てば、S組生徒よりも上である彼ら自身に認めさせ、さらにS組代表の代名詞とも言える委員長という称号を得る事によって他クラス、さらには学園への影響力も増す事になる。

つまり、将来的に川神学園の頂点に立たんとする武蔵小杉にとってこの提案は悪いものではない。

そこまで考えて小杉は堂々と解答を返した。

「……いいわ。その提案、プツレーミアムに受けてやろうじゃない！」

その姿を見ながら、いきなり蚊帳の外に立たされた由紀恵は不思議に思っていた。

(あれ? いつの間にか、話の主導権が武蔵小杉さんではなく皐月さんが握っているよ
うな……?)

確かに最初の主導権は小杉が持っていたのは間違いない。何せ決闘の話題を持ってきたのは彼女である。小杉自身、物怖じしない・自己主張が強いという性格であるのが一見してわかるが故に、小杉が選択肢を投げかけて奏がそこから選ぶという流れになるのは自然である。

しかし現状はというと、気付けば選択を迫る側である小杉が、選択を迫られる側であるはずの奏からの提案を選ぶという、立場が逆転している状態である。

人とのコミュニケーション経験不足からくる違和感なのかも自虐的に思ったが、由紀恵はその事に不思議と違和感を抱いていた。

「なら明日の朝にさっそくクラスに提案しないと……」

「別に明日でなくとも今知らせるから大丈夫よ。Sクラス全員にメールで送っておくから安心して」

「……………え？」

携帯を操作しながら口にした奏のその発言に、思わず小杉の動きが止まった。

入学式当日で自己紹介も終わったばかりの放課後である現時点で、既にクラス全員にメールを送る事が出来る。

その事実を、小杉を動揺させるのに十分すぎるモノであった。

「ちよ、ちよつと待つて。クラス全員にメールって、え？ 連絡先の交換とか、いつの間に!？」

「これから一年以上同じクラスで切磋琢磨するのだから連絡先を交換しようとするのは不思議ではないでしょう？ あ、まだ武蔵さんとは交換してなかったわね」

そうやって奏がさらに携帯を弄ると、小杉の携帯から着信音が流れてきた。

「な、何で……………まさかプツレーミアムな私のメアドを知って……………!？」

「それが私の連絡先だから登録しておいてね」

何故知っているのかと動揺する小杉の姿を気にすることなく何でもないような表情でそう告げた奏を見て、小杉は無意識に一步後ずさってしまふ。

もしかするとコイツは既にクラスを掌握しているのでは……そんな突拍子もない想像が脳裏を過ぎり、それと同時に湧き出てきた不安を吹き飛ばすように小杉は一言啖呵を切った。

「こ、これで勝ったと思わないでよね！」

……そんな捨て台詞とも思えるような言葉を残して足早と去っていく小杉を見て、その場に居合わせた人々は勝負自体まだ始まってすらいらないのにどちらに軍配が上がるのか想像がついていた。

『武蔵小杉は臯月奏よりも一枚劣る』……事実はどうあれ、先程までのやり取りにより、小杉はそういった印象を大衆に与えてしまったのだ。

例え今回の決闘に小杉が勝ったとしても、この印象というのはそう簡単に拭い切れる

ものではないだろう。

「あらあら、どうしたのかしらね」

そう言いながら笑みを浮かべる奏を見て、由紀恵は証拠もないのに完全に察してしまっていた。小杉が決闘を吹っ掛けてきてからの流れが彼女の掌の上での出来事だったという事に。

「た、戦わずして勝敗が目に見えてしまいました……」

「ぱ、パネエ、パネエよ奏っち！ その凄まじいまでのコミュ力、どうすれば身に着けられるのか是非まゆっちにも教えてやってくれよ！」

目の前にいる友人（仮）が思っていた以上に凄い存在だったのに驚きつつ、その一端を教授してもらいたいと由紀恵が思っている所で奏の持つ携帯から着信音が鳴り響いた。

「私よ……何ですって？」

その電話を取った奏の様子が徐々に少し険しいモノになっていくのを見て由紀恵は何かあったのだろうかと心配そうに見ていると、電話を終えた奏が申し訳なさそうに口を開いた。

「ごめんなさい、黛さん。少し用事が入ったから先に帰らせてもらうわ。よければステージを見てどうだったか感想を聞かせてちょうだい。場所と時間に関してはこれに書いてあるから」

「え？ あ、はい」

そう言って何かチラシのような物を由紀恵に渡した奏は、返事をきちんと聞く間もなくそのまま足早にその場を後にした。

「……奏さん、何か大変な事でもあったのでしょうか……？」

「かもしんねーけど、オラたちに出来る事なんて奏っちのお兄さんのステージ見て感想言うくらいしかできないしねー……」

「確かにそうなのですが……ところで皐月さんのお兄さんの部活動は何なのでしょう

「？」

「えーっと、確かさつき奏つちが渡してきたチラシは……………」

「女子偶像研究部…………スクールアイドル活動をしている部活……………あれ？」

「女子って事は少なくともステージに出るのは歌って踊れる可愛い女子だけって事だよ
ねー？ アイドルの研究成果を報告するステージじゃない限り」

「もしかして皐月さん、渡されるチラシを間違えたのでしょうか…………？」

「いや奏つちもちゃんと確認して渡してたぜ」

「ならお兄さんは裏方での助っ人なのでしょうか？」

「いやステージに出るって言ってなかった？ というか裏方ならわざわざ見に行かない
って」

「…………お兄さん」というのが私の聞き間違いだったのでしょうか…………？」

「いやオラも『兄』って聞いたけど…………まさか兄という名の姉…………!？」

変な誤解と疑惑を残しつつも、川神学園新入生の入学初日は過ぎていった…………



街に夜の帳が下り、しかして人工的な光が灯って辺りを照らし始めた頃、行動を開始する。

フード付の外套を身に纏い、身を隠すような格好をしているにもかかわらず、自身から放たれる敵意を隠すことなく歩いていく。

人気の少なくなってきた周囲を意識しつつ、未だに違和感が拭えず慣れない四肢を自然と動かすのに苦労しながら目的地向かって一直線に進んでいく。

その最中に自身のコンディションを確認していく。

（戦闘能力は落ちた。感覚の齟齬もある。が、これくらいなら問題ない）

万全で動けない事にはある程度慣れている。感覚のズレも直に慣れてくるだろう。

……今からしようとしている事は褒められた事ではない。八つ当たりにも等しい事だと理解している。

だが、自分と同じような目に遭う人が出てこないためにも、自分に出来る事をしよう
と決めたのだ。

そのためならば、私は必要悪だっとなってやろう——

「——そんなに殺気立ってどこへ行くのだお嬢さん」

——そんな思考の隙間を縫うように、その声はするりと耳へと入り込んできた。

「……………誰だ？」

「名乗る程の者ではない。ただここから先に何の用かと思ひ声をかけただけの事だ」

この先には研究所しかないぞ、と口にするその人物は夜の漆黒に溶け込むには少し明るい宵闇のような長髪を持つ軍服を着た麗人だった。しかしその中性的な雰囲気によつて性別は読み取れず、深く被られた軍帽が落とす影から覗く眼光以外表情を読み取る事が出来なかった。

「そんなに敵意を隠す事もなく歩いていると問答無用に怪しまれる。特に外に漏らしてはいけない秘密を抱える者ほどその疑念は大きくなる」

不審者とも判別できるその姿に、異様な静けさに疑惑を抱き周囲の様子を伺えば、不自然にも周りにはその声の主しかいなくなっていた。

「——故に、私のような者と遭遇する事になる」

そして、その言葉とともにその軍服麗人の身体から敵意が放たれた。

「……なるほど、つまり用心棒というわけか」

濃密なその敵意を肌で感じて相手の力量を測る……そこらの警備員程度に出せるものではなく、その立ち振る舞いも含めると相当な実力者——もしかすると壁超えク

ラスの可能性とて十分にあり得る。

「……最初からこのレベルの用心棒がいる場所に当たるとは、運がない」
「そんな事はない。ここで私に見つかつた事はむしろ幸運と言えるだろう。研究所に
けばもつと怖いガードマンがいただろうからな」

やはりというべきか、向かう目的地が研究所である事が完全にバレている。という事
はつまり、その目的もやはりバレているという事。

さらに今の言葉を信じれば、その研究所には目の前の麗人よりも強い存在が警備をし
ているという事になる。……やはり運がないという他ない。

「……だが、ここでやめるつもりはない……！」

そう自身を奮い立たせて、拳を握る。やはり少しばかり違和感があるが、気にしてい
られない。ここを突破しなければ目的を果たせないのなら、無理をしても突破するだ
け。

そしてその行為から此方の意志を悟つたのか、軍服麗人も腰に帯びた軍刀に手をか

け、臨戦態勢へと移った。

その表情は、やはり軍帽の影に隠れて全貌を把握する事は出来なかつたが、黄金色に光り輝くその瞳は、何かを訴えかけるように此方を射抜いていた。

「さあ、貴様の信念^{オモイ}を見せてくれ——」